

日本道德教育方法学会 第4回オンラインセミナー報告

私の授業づくりと授業実践 Part2

—学会DVDの授業実践の紹介—

第4回オンラインセミナー「私の授業づくりと授業実践 Part2」をふりかえって

島 恒生（畿央大学）

日本道德教育方法学会オンラインセミナーの第4回「私の授業づくりと授業実践 Part2」が、2022年8月28日（日）13時から行われました。

オンラインセミナーは、学会員の道德教育に関わる研究や関連諸分野の学際的総合研究の推進に資するため、昨年度から始まり、今年度は2年目です。今年度は、第4回～第7回の計4回行われます。

第4回は、香川大学附属小学校の5年生「より高い目標に向かって」と6年生「自分の心に誠実に」の実践でした。

谷田増幸会長からのご挨拶に始まり、鈴木篤会員の進行のもと、DVD を視聴した後、西吉亮二教諭、植田和也会員、清水顕人会員による発表ならびに質疑を通して、「考え、議論する道德」の実現に向けて道德科の授業づくりで大切にしている考え方や具体的な工夫について考えました。最後に、七條正典理事による「まとめ」が行われました。

参加者は、38名で、そのうち19名からアンケートの回答をいただきました。今回のオンラインセミナーについて「非常に満足した」「満足した」が18名、「どちらでもない」が1名、今回のオンラインセミナーの内容で自身の実践や研究に役立つところが「非常にあった」「あった」が18名、「どちらでもない」が1名と、よい評価をいただきました。

小川哲也企画委員長の閉会のご挨拶では、第1回と第4回のオンラインセミナーで取り上げた学会25周年記念事業で作成したDVDが、会員によって益々活用されることのお願がありました。

参加者からいただいた感想をいくつか紹介します。

- DVD を用いた授業視聴から実際に授業をされた先生の解説など、大変興味深かったです。
- 子供の道徳的な問いを大切にした授業、個々の問いを学習課題に高める工夫、道徳的な価値に向かう視点の変更について大変学ばせていただきました。
- 子どもたちが問いをつくるという実践は興味のあるところであり、その過程や方法が参考になった。また、その後の協議の中で、問いづくりが道德科の活動の目指すところではないとのご意見は、授業の中での問いづくりを「手だて」としてどのように位置づけ、どんな活動にしていけるのか考えていく際の指針となりうる言葉であった。
- 範読の意義について考えさせられました。内容項目や教材の特性に応じて、事前読みを取り入れるかどうかを判断していくことが求められるように思います。

授業実践の見どころ:進行を通して

鈴木篤(九州大学)

「私の授業づくりと授業実践」の第2回にあたる今回は、①小学校第5学年(主題「より高い目標に向かって」)と②小学校第6学年(主題「自分の心に誠実に」)の二つの授業が取り上げられました。

両授業の冒頭では児童が事前読みの際に抱いた感想や疑問が補助黒板に示され、本時の学習における問いの設定が行われます。その後、授業中、子どもたちには道徳ノートに自らの考えを書くことで自らの考えを整理し、発言することが求められます。そうして教師は子どもたちから出された複数のキーワードを板書した上で、子どもたちに自らの考えがどのキーワードに近いかなを選ばせ、グループで意見を交流させます。それは、そうすることで子どもたちの間の考えの違いや共通点などを可視化させるためです。

もっとも、子どもたちから出されるキーワードは、必ずしも授業者が事前に予想・想定しているものばかりではなく、授業者のその場の判断・対応が問われることになる場面も多くあるとのことでした。授業者には事前の相当な教材研究が求められるとともに、授業者自らも多面的・多角的に考える力を備えておかなければ、子どもたちの発言に戸惑ったり、あるいは子どもたちの考えを受け止めきれなくなってしまうたりする可能性もあるのでしょう。

また、授業冒頭での、子どもたちの感想や疑問から学習のめあてや課題を作り上げようとする試みについては、子どもたちに課題を作る力を育てる(課題づくりに慣れさせる)ことそれ自体が目的となってしまうのは、もはや道徳の学習とは言えないため、深い道徳的思考を生み出すために必要な場合には教師の側からの適切な介入も必要なのではないかとの意見も出されました。たしかに、道徳授業において取り上げられる問いが(教師から押し付けられたものではなく)子どもたちから出されるものであってほしいというのは、教師や教育学者にとって切実な願いではありますが、ただ、道徳学習において手段と目的を取り違えてはいけないというのは重要な指摘だと思われます。

今回取り上げられた2つの授業はいずれも授業者や授業協力者の相当な準備や努力の上に練り上げられた授業であり、また、国立大学教育学部の附属小学校の子どもたちを対象とした授業でした。それゆえ、通常の公立学校にそのまま応用できる部分ばかりではないかもしれません。しかし、道徳教育に熱意を持って取り組む先生方がご覧になれば、数多くの気づきやヒントを得られる授業だったのではないのでしょうか。こうした各地での実践の知が広く共有され、さらに新たな実践の基盤となっていくことが期待されますが、今回のセミナーもまたそうした機会の重要なひとつであったのだと感じております。

まとめ

七條正典(高松大学)

今回の二つの授業実践とその解説並びに話題提供、及び質疑を受けて、今後の授業づくりを考える上で参考になりたい点についてコメントします。

1 「事前読み」を取り入れることの意義と留意点

「事前読み」については、例えば感動教材の場合など事前読みをすると感動が薄れてしまうという理由で、否定的な意見もあります。しかし、本実践では、あえて「事前読み」を取り入れ、子どもの感想や疑問(問い)をあらかじめ教師が把握・整理して授業に臨むことで、子どもの主体的な学びにつなげようとしていました。また、本時で学ぶ内容と自分の体験とをつなげるようなアンケートを事前に取り、それをもとに「本時のめあて」(学習問題)につなげることで、本時の学習内容を子どもが自分事として考えられるよう工夫していました。つまり、「事前読み」を取り入れることで、子

どもが教材(内容や価値)としっかり向き合い、そこから引き出された課題意識を大切にしたい主体的な学びにつながる授業づくりを提案されていた点がたいへん興味深いと思いました。

しかし、浅見先生からもご指摘があったように、全ての教材においてこの「事前読み」を取り入れることが有効かどうかについては、さらに検討が必要です。

2 個の「問い」から、共に学び合う「問い」の共有化へ

提案にもありましたが、主体的な学びとなるために、児童一人一人の「問い」は「個別最適な学び」につながるものとして大切です。しかし、個の「問い」は学び合うことを通して深められます。つまり、「問い」は、個の「問い」から共に学び合う「問い」へと共有化されることによって、はじめて意味をもつと思います。本実践では、個の「問い」を、共に学び合う「問い」の共有化へと「協働的な学び」(対話的な学び)となるまでの過程を大切にしていました。具体的には、「事前読み」による子ども一人一人の感想や疑問と、教材の内容(主人公の悩みや問題)とをつなげながら、学習のめあてを子どもと共に導き出していった本時の導入の過程が参考になると思います。

児童の「問い」と教師の「ねらい」とをどうすり合わせ、学習のめあてをつくっていくかについては、本実践も踏まえ、今後さらに研究を深めていく必要があります。

3 共に学び合い、深めていくための視点づくり

本実践では、「夢や目標をかなえるために大切なことはどんなことだろう」「誠実に生きるとはどういうことだろう」という学習のめあてを提示して、そのことについて話し合う際、それぞれ[A 強い心, B 支えてくれる人, C 好き, D 努力][A プライド(ほこり), B 素直さ, C けじめ, D 信頼]など、その学習のめあてを考え深めていくための視点を導き出していました。そして、子ども一人一人がそれらの視点のどれを選択するか決め、その理由付けを書き、それをもとに話し合いを進めていました。つまり、多面的・多角的に考え、深まりのある話し合いが成立するためには、漠然と話し合うのではなく、共に学び合うための視点を明確にもって話し合うことの必要性が示唆されています。「ロレンゾのともだち」の場合は、登場人物である「A ニコライ, B アンドレ, C サバイユ」の視点がそれになります。

本実践における共に学び合うための視点の導き出し方や、それを基にした話し合いの工夫を参考にしながら、今後さらなる改善が求められます。

4 相互評価を取り入れたより適正な評価(「振り返り」)の在り方

本実践では、自らの学びを「振り返り」評価する(自己評価の)場を工夫していました。

各自が自らの学びを一定の視点で評価する際、自己評価をして終わりではなく、その評価を他者(友達)と交流することによって相互評価を促していました。このことによって、自らの振り返りを、より客観的に意味(価値)づけることができていました。つまり、共に学び合うこと(協働的な学び)による子どもたち一人一人の考えの深まりは、相互に確かめ合うこと(相互評価)によって、主観的な評価から、より適正な評価になるのではないかと思います。